

辛亥革命時期の湖北における革命と反革命

——江湖會の襄陽光復を中心に——

狹 間 直 樹

一

周知のように、百有餘年におよぶ中國近代の歴史は、武装した革命と武装した反革命のたえざる闘争の歴史であった。帝國主義および封建主義との、この苦難のたたかいに勝利した中國人民にしてはじめて、ここ數年にわたって全世界を震撼させ、人類史に新たな展望を切りひらいたプロレタリア文化大革命の偉大な壯舉も爲しとげることができたのである。

一九一一年から一九二二年にかけて、ブルジョアジーと小ブルジョアジーの革命派の指導によって闘われた辛亥革命は、中國人民解放闘争史上、特異な意義を有する革命であった。中國人民は、二十世紀初頭における世界的な反封建の闘いの一翼を擔い、異民族王朝の封建專制支配を武装闘争によって打倒した。數かぎりない無名の英雄たちの血潮でもってかちとられたこの成果は、中國いなアジアの人民の覺醒の偉大な表現であり、義和團闘争と並んで新しい時代の開始を明確に物語る出來事であった。人びとは、みずからの階級の利害に即して、それぞれに新生の共和國における幸福な生活を約束されるであろうと夢想し、いまだかつて味わったことのない自由な政治的状況のなかで可能なかぎり奮闘した。しかし、ほぼ半年におよぶ動亂の

時期が過ぎさつてみれば、よりいっそう買辦的な袁世凱の軍閥權力の壓制下にある現實を見出して愕然とせねばならなかった。つまり、革命の成功と失敗は、その結果としてより強力な反革命の密集部隊を創り出したのであるが、このように、矛盾が解決されたのではなくて内攻させられ、半植民地半封建的社會關係がさらに深化したことによって、中國人民は、より高次の歴史的使命にむかつて解放闘争をたたかわねばならないという歴史的狀況のもとに置かれたのである。

辛亥革命が二千年來の專制支配の打倒という偉大な成果をかちとりながら、なにゆえにかくのごとき挫折を蒙り、またいかなる原因でかかる結果をしか齎しえなかつたのかということについては、さまざまな問題の解明を必要とするであろう。しかし、斷わるまでもないことであるが、すべての問題についてここで取りあげる餘裕はない。この小文の意圖するところは、ただ湖北省、それも襄陽地方における革命と反革命の闘争を能うかぎり克明に追跡し、人民の闘うエネルギーが革命をひきおこしたにもかかわらず、その結果として何故に反革命權力の確立をみるに終つたのかということについて及ぶかぎりの分析を行うことにかぎられている。湖北をとりあげるのは、「首義の區」の持つ政治的地位を重視したからではなく、黎元洪の權力の確立過程が當時における反動支配の確立の典型をなしていたからなのである。なかでも襄陽に焦點を絞つたのは、顧祖禹に組して「湖廣の形勝」を論じて「天下全體よりみれば、襄陽が第一である」⁽¹⁾との意義づけをしたからでは、けつしてない。清初までとは異なり、この時期には襄陽はもはや一地方都市であるにすぎず、したがって、襄陽光復に際しての當時の新聞記事のあつかいも、それ相應の大きさのものでしかなかつた。また、襄陽の光復は、革命派とまったく無關係に、江湖會なる會黨によつて擔われたため、後の革命派の一連の著作などにおいても、ほとんど正確には觸れられていない⁽²⁾。しかし、まさにそのことこそ辛亥革命の歴史的位位置を正確に反映していたのであつて、會黨によつて光復されたこの一地方都市を取りあげることが、同時に全國的な問題の解明につながることもなるであらう。ブルジョア革命思想と並んで革命の二大要因をなす人民の革命的行動の實體を明かにし、人民の革命史を構築する一階梯となすこと、本稿の目的はここにあるのである。

一九二一年十月十日、湖北省都武昌において、新軍兵士の武裝蜂起が敢行され、翌日には全城が光復された。この蜂起は、文學社・共進會等の革命黨に結集する兵士大衆によって擔われたものであり、つづいて、漢陽・漢口とその周邊の諸縣も、革命黨員の指導のもとにつぎつぎと光復されていった。ここにおいて、清朝の支配體制は、まず湖北の中心部で崩れさり、二重權力の状態が創りだされた。ところが、革命黨員たちは、政權の樹立にあたって、首腦の不在という周知の事情から、立憲派はいうにおよばず、清朝の舊官僚などの反動派にまで門戸を開いたので、その政權は初發からきわめて脆弱なものにしかならぬえなかつた。革命權力の最高位である軍政府都督に就任したのは、清朝の武官、第二十一混成協統黎元洪であり、民政長には立憲派の湖北諮議局議長湯化龍が選ばれた。この反動的武官は、後、さらに革命の元勳にまで成りあがつたのであるが、この點に當時の革命派の弱點を集中的にみとることができるところである。當時の革命派は、たしかに一般的には人民のたたかうエネルギーに支えられていたのであるが、政權内部においては、立憲派でも反動派でも、ただ反滿を唱え、共和に贊成しさえすれば、かれらと妥協し、さらには膝を屈して協調を求めさえした。しかし、それは人民から遊離することによってのみ可能とされることであつたのである。

省城光復後、數日ならずして湖北省西北部の襄陽にも、武昌蜂起が成功して黎元洪が都督になつたというニュースが傳わつてきた。まっさきはその影響を受けたのは經濟界で、たちまち紙幣風潮が發生し、ついで米價騰貴が始つた。これよりさき、四川暴動の發展に恐怖した清朝は、革命にたいする豫防措置の一環として武昌の新軍馬隊一營を襄陽に派遣した。この馬隊の文學社社員章裕昆らは、武漢光復という好機に乗じて蜂起を畫策したが、當地の巡防營に手がかりがなかつたのと、裏切りが發生したため、失敗した。このように襄陽では革命派の勢力があまり強くなかつたので、途中で劉英・梁鍾漢らの革命軍に仙

桃鎮で敗れたとはいえ、巡防營統領劉溫玉は、五營を率いて漢水を下り、武漢を衝こうとしたりもした。⁽⁶⁾しかしその間にも、ここ襄陽において文學社・共進會等とはまったく無關係に革命を準備しつつある社會的勢力があった。その勢力とは江湖會とよばれる會黨であった。

江湖會は紅幫・洪門のこの地方における呼稱であったというから、清代における祕密結社の二大流派の一、天地會の系列に屬するものである。それは、他の多くの會黨がそうであったように、階級關係を異民族支配にたいする反發という形で包みこみ、「興漢滅滿」「漢山の江山を恢復する」等の民族革命の旗印をかかげていた。かれらは、水滸傳・三國志演義に登場する義によって結ばれた模範的な英雄豪傑たちを慕って「江湖の義氣を講究した」ため、その集團を人よんで江湖會といったとい⁽⁷⁾う。當時の會黨は、都市の貧民層と破産農民をその主要な構成要素としており、當時にあつては、廣範な人民の日々に悪化する生活にたいする不満と現體制にたいする憎惡を、不十分ながら政治的に直接に代表しうるほとんど唯一の社會的勢力であった。江湖會は一九〇七年の蜂起失敗後、軍隊にたいする働きかけに活動の重點をうつし、辛亥革命直前には、軍隊内にながりの勢力を有するにいたつていた。その結果、軍隊中の會黨は、人數もさりながら、武装をたのんでほとんど公然活動を行つたりもし、かえつて權力側の容赦ない彈壓を招くこともあつたとい⁽⁸⁾う。

ところで、襄陽光復の突破口は、府城の西北百餘軒にある光化縣とその外港ともいふべきこの地方の商業中心地老河口鎮における、新軍兵士の蜂起によって切りひらかれた。光化・老河口の清軍兵力は、原來、巡防歩兵・水師營數百人、巡防馬隊約百人、それに釐金局の巡警營若干を數えたにすぎない。⁽¹⁰⁾そこで光化知縣の黃仁葵は、武昌蜂起の報を聞かや、「急ぎ四郷の紳士に檄し、練團自衛させる」とともに、「生命財産の虞れなきを保しうる」よう、老河口の紳商たちに漢口をモデルとして數百名の商團を結成することを提起した。即日、承諾された寄附が萬餘貫、また快槍百二十枝・彈丸七千發等の武器調達の目途もついて、數日後には、革命を鎮壓し、地方の治安——すなわち舊來の搾取秩序——を維持することを目的とした商團が組織された。⁽¹¹⁾そして、この商團は當地の軍事の最高責任者である巡防營管隊周祥謙(文獻記載では周飛鳳)により統率されることにな

った。ところが、このようにして成立した商團の團員の多くが、ほかならぬ紅幫の成員であったため、肝腎の時にこの商團は反革命の暴力装置としての機能を果しえなかった¹²⁾。また、一時、河南省南陽の道臺謝寶勝の配下の一營が老河口に駐屯して革命鎮壓の一翼を擔っていたが、會黨はその河南軍兵士にも積極的な工作を行い、兵士の革命化を恐れた指揮官が、光化光復の直前に軍隊を河南省境にむけて移動してしまつたので、これも現實にはなんの役にも立たないことになつた¹³⁾。

十一月二十八日、江湖會黨と結んだ新軍馬隊の排長張國荃・弁目李秀昂らは二十數人の兵士を率いて、光化・老河口を光復した。この地方の江湖會は「同盟會と正式の關係はなく、軍隊の中ではおたがいにあつたが、世間ではおたがいに消息を通じあわなかつた」ので、この蜂起は、「事前に同盟會と連絡することなしに、ただ軍隊の中の紅幫とのみ連絡して」敢行されたものであつた。さらにいえば、事前の連絡がなかつたばかりではなく、襄陽光復後にいたつても、「まえから襄陽に駐留していた新軍馬隊中の多くの革命黨員、文學社社員と共進會會員はみな江湖會の蜂起に賛成せず、大多數のものは武昌に歸つてしまい、その數は數十から百餘人にも達した」という。その理由として、かれらが新政權の重要ポストを得られなかつたからという、ブルジョアジー・小ブルジョアジーに固有のエリート主義的實權派意識が擧げられているが¹⁴⁾、これはおそらく妥當であろう。それにくわえて、かれら革命派にとつてさらに致命的な弱點は、「われわれ革命派はもともと、これらの知識のない者(會黨)を利用して革命の勢いを盛りあげ、革命の目的を達しようとしただけであつた」¹⁵⁾などという、人民をたんに自分たちの目的實現のための手段として利用しようとする思想であつた。このような點にも、當時の革命派が、武昌をはじめ到るところで、人民に背を向けて立憲派・反動派と野合していく必然性、すなわち半植民地中國の革命派ブルジョアジーのもつ歴史的限界が如實に示されていたといえよう。

江湖會黨は、このように革命派とまったく無關係に蜂起に突入したのであるが、蜂起に先立ち、かれらはかなり周到かつ大膽に準備活動を展開していた。かれらは目立たぬように町へ行き、街頭で「兄弟たちよ！ 漢族は起ち上がらなければならぬ。われわれは滿洲族の奴隸であつてはならない……」等々の宣傳煽動を行うとともに、ひそかに巡防營等の兵士にたいする

働きかけを強めていった。⁽¹⁶⁾當時、北洋新軍以外のほとんどすべての新軍がそうであったように、かれらも鐵砲はあるが彈丸はとりあげられていたので、蜂起するにも舊軍の武器を頼るほかはないという状況にあったが、かかる危機的状況のもとで、光化光復はちとられたのであった。

十一月二十八日といえば、すでに漢陽も清軍に陥され、武昌の拋棄が云云されるなど、湖北軍政府成立以來、革命軍が最大の苦境に追いこまれたときであった。その日、老河口の紳士邢安福の宴會に知縣黃仁葵・巡防管帶周祥謙以下の官員が出席していたところへ、あたかも徐錫麟の襲撃を想起させるかのごとく、張國荃・李秀昂がわずか二十騎前後の馬隊を率いておしかけ、知縣以下に「反正を宣布する」ことを強要した。⁽¹⁷⁾なみいる官僚どもは、これを拒みえず、外面では受けいれるかのような態度を示した。そこで張國荃・李秀昂らは、電報局・官錢局を押さえて必要な措置をとるとともに、行進に際して、「興漢滅滿」「商・民を保護する、賣買は公正にせよ、物價のつりあげを禁ずる」等のスローガンを呼ばわって歩いたが、さらに數百人の會黨も出てきて「滿人を打倒せよ！ 漢族は兄弟だ！」と唱和した。⁽¹⁸⁾また、一般の人民も街頭に躍りでて、「革命軍がやってくる、さあ白旗を掲げよう！」などと言いながら、革命の成功を喜びあびあつたという。⁽¹⁹⁾

この地の革命軍の、清朝官員の投降者にたいする態度は、きわめて緩やかであった。かれらもまた、辛亥革命の際の全國各地の革命家と同様に、漢人が政權を握りさえすれば革命は成功だ、滿洲朝廷に反旗を翻しさえすればその人は味方だとする、あの致命的な誤謬に陥っていた。これは孫文をはじめ當時の最高の理論家でさえ克服しえなかつた問題なので、會黨が十全に対応できないのも當然ではあつたが、それにしても、その結果として新政權が弱體となつたことは、革命にとつて取りかえしつかないほど大きなマイナスであつた。ただ、この光化光復にあつて、李秀昂の決斷により、當地の軍事面の最高指導者、巡防管帶周祥謙だけは殺害された。これによつて反革命の蠢動が封じられ、革命軍の武力掌握は容易になつた。現實に、周の死後、巡防營の兵員と裝備は、すべて蜂起軍によつて接收されたのである。⁽²⁰⁾

光復の日の午後、江湖會の代表と當地の官紳は官錢局に集まり、湖北軍政府襄陽軍政分府光化軍務部なる政權を樹立した。

即座に、「漢族ヲ光復シ、韃虜ヲ驅逐ス、漢ヲ興シ滿ヲ滅シ、商ヲ保シ民ヲ保ス」との「安民告示」が李秀昂の署名で發布された。また、各商店に平常どおり營業を命ずるとともに、剪髮令等を下したりもした。⁽²²⁾この會議には、舊來の支配階級たる官紳のみならず、帝國主義の尖兵たる老河口天主堂の牧師まで出席していたというから、この新政權もけつして十分に強力なるものではなかつたが、江湖會の指導者たちは、みずからの手で老河口の自治を行うとともに、軍隊の指揮權を掌握することによつて、實質的權力はしっかりと把握していった。⁽²³⁾

このようにして、光化・老河口は江湖會によつて制壓されたのであるが、張國荃はこの力に依據して、この地方の反革命の牙城である襄陽に進撃することを決定した。この時、革命軍はわずか數百人ぐらゐであつたから、人數の不足を云々する者もあつたが、張國荃は「兵は速きを貴び、多きを貴ばず」としてその意見を斥け、その夜に新兵二百人を加えて、水陸兩路より襄陽にむかつて進軍した。⁽²³⁾その際、兵士に應募する者には紅幫の成員が多かつたといふ。⁽²⁴⁾もちろん、いづれの革命軍も草創當座はそうであるように、この軍隊も英雄的な革命精神は旺盛であるが、武器は足らず、訓練も受ける餘裕がなかつた。しかし、沿道いたるところで人民の支援をうけながら、江湖會に指導された人民的軍隊は、省都などがすでに達成していた「解放」をかちとるべく襄陽を目指して進撃していったのである。

三

武昌が革命軍に占領されるや、荊州と並ぶ湖北の要衝襄陽においても、安襄鄖荆兵備道喜源は内閣に十營の軍隊の募集を願⁽²⁵⁾いでるとともに、當地の紳士に呼びかけて團防を組織し、反革命の體制の整備をはかつた。⁽²⁶⁾喜源は、また巡防營統領劉溫玉に五營を率いさせ、荊州の駐防軍と協同して武漢攻撃を實行したが、それは前述したように失敗に終つた。この劉溫玉にたいして、黎元洪が反正を呼びかけたため、光復以前において襄陽における政・軍の最高指揮者の間はあまりうまくはいつてなかつ

たという⁽²⁷⁾。しかも、府城光復に際し、巡防營を中心とする約千名の清軍は、清末の各地の舊軍がそうであったように、武官の私腹を肥やす道具にされていたため、戦闘能力はきわめて低いものでしかなかった⁽²⁸⁾。一方、武昌光復とそれにつづく湖北各地の光復、また首義の湖北に呼應してそれから五十日ばかりの間に華南の十四省が光復されるという全国的な革命的激動のなかで、襄陽に歸ってきた革命的學生たちは、道臺衙門の門前にステッカーを貼るなどの活動を行い、巷間には、學生が爆彈を持つているというような噂も流れ、緊張が高まってきていた⁽²⁹⁾。また、光復前夜には、江湖會の大爺何義茂が輩下數十人を率いて襄陽に派遣され、内應を策したりもしたので、城内の治安は大いに亂れていたという⁽³⁰⁾。

かかる状況のもとにおいて、光化の革命軍の進撃が傳えられるや、その先鋒隊はわずか三百人ぐらいであったらしいが、道臺喜源は、辛亥革命の時の多くの滿洲人官僚と同じく、財産を當舖にあずけて逃亡してしまった⁽³¹⁾。また、劉溫玉はすでに兵士を統率する力を失っていた。李秀昂の部隊が城壁を攀じ登りはじめるや、團總の楊廉溪が開城を指示し、かくして十一月三十日朝、襄陽およびその對岸の樊城が光復された⁽³²⁾。革命軍の規律はきわめて厳正で、人民は家ごとに白旗を掲げてこれを歓迎した。實際、襄陽・樊城では、革命軍の到來以前にすでに、「早く來い來い革命軍、革命軍は大砲持って、まず襄陽を占領し、それから謝寶勝をやっつける」という即興歌が唄われていたし、また、革命軍の入城後には、「白旗は招くよ、漢水のほとりの獨立を」とか「滿洲人をやっつけなけりや、死ぬに死ねないこのつらさ」等の歌謡が流傳したりもしたという⁽³³⁾。

府城光復の日の午後、紳商軍學界の有力者が昭明臺に集り、軍政分府の組織を討議した。そして投票によって、黃仁葵を襄陽軍政分府分都督に、張國荃を襄陽軍政分府司令に選んだ⁽³⁴⁾。分府内の役職は、その多くが紳士等によって占められた。ここでも、革命の結果として前清の知縣が分都督に就任し、舊體制下の支配階級が軍政分府の要職を占めたのであるから、この革命政權が非常に不安定なものとして成立したことは明白であった。實際、黎元洪や黃仁葵のような手合が革命を望んでいたはずはないのであり、ただ情勢のしからしむるところ、いつの間にか革命政權の頂點に押しあげられてしまったというにすぎなかった。しかし、かれらがいかに受動的に權力の座に押しあげられたにしろ、ひとたび自分を取りもどせば、その階級的立場に

即した行動をとりはじめるともまた明白であった。たとえば黄仁葵にあっては、「此度の行動は仇満のためのものではなく、實はこうすることによって民を守ろうとしたのです」と述べているように、革命派の強調してやまぬ排満の立場さえなく、ただ「民を守る」ために革命の側に立ったというにすぎない。しかし、革命の激動の中で知縣であった自分をも含めてすべての民を守ろうとすることが、舊體制下の搾取階級・有産階級を守ることにしかならないのは、あまりにも當然のことであった。かくては、革命が成功の瞬間から後退運動を開始するのも必然的であったといえよう。

しかし、軍政分府司令張國荃に指揮される権力の支柱としての軍隊の事情は若干異なっていた。光復後、陸軍は新たに三協が編成され、水軍は舊來のものが二營に改編されて、各々襄陽・樊城・老河口に配置された。紅幫が募兵を援助したこともあって、清朝支配下でもっとも抑壓されていた貧民が勇躍應募し、また、解放された獄囚の多くも兵士になった。そして、この軍隊では、軍官はすべて兵士の選挙によつたので、紅幫首領や新軍兵士たちが長官に任ぜられることになった。したがって、襄陽軍政分府の暴力装置は、武昌等とは異り、かなり人民的な性格をもつて確立されることになったのである。

襄陽府屬の各州縣も、光化および府城の光復後、つぎつぎと光復されていった。武昌光復後、各地とも紅幫等の蜂起が畫策され、いずれも未發か失敗に終つていたのが、この地方における清朝権力の政治的集中が打倒されるや、即座に光復されたのである。しかし、府屬各州縣の光復は、ほとんど襄陽光復を小規模に、あるいは矮小化してくりかえしたものにすぎなかった。穀城縣は、十一月三十日、紅幫海鳳山が團練を率いて蜂起したが、政權はやはり「印を繳めて仍お留任した」知縣の手に握られた。南漳縣では、巡防營が呼應したが、ここでも知縣が光復後の爲政者となり、宜城では知縣みずから軍政分府に派兵を請うて長官に任ぜられ、均州でも事態は基本的に同じであった。そして、十二月中旬、河南南陽の清軍の壓力をもつとも強く蒙つていた棗陽縣も、停戦協定が成立したこともあって、同じく光復された。かくして襄陽七屬にはすべて革命政權が樹立されたことになったが、その内實は役所の看板を掛けかえただけにすぎないというところだったので、これも襄陽また武昌にとつての敵對的な勢力がなくなったというより以上の意味を持ちえなかつたのである。

さて、前述したように、襄陽軍政分府は初發からすでに反動派や投機分子によってその革命的性格を骨抜きにされつつあったが、清朝支配の打倒に光明を見出した人民の支持と江湖會を中心とする軍隊の存在があったために、不十分ながら一連の革命的措置を実施することができた。光復の當日、張國荃は部下に命じて府衙門のまゝに机を並べて白旗をたて、官僚どもに「革命に服従する」ことを畫押して表明させた。これには、紳士たちも遅れじと同調し、また、多數の市民も署名して決心のほどを示した。⁽⁴³⁾ もちろん、署名によって革命が成就するわけではないが、張國荃の武力が官僚・紳士を懾伏させていた様子をここにみてとることができる。また、張國荃は龍王廟の破壊や科第榜・封贈榜のうちこわしを命じ、舊體制の精神的支柱を紛碎しようと試みたりもした。⁽⁴⁴⁾ そして、さらに注目すべきは、この貧民に依據した會黨の軍隊は、たんに「人民を愚弄せず、公平な賣買を行う」ことによって人民的規律を示したのみならず、「たえず貧乏人を救済し、かれらに米や薪を買う金を與える」ことによつて經濟面での救済措置をとつたりもしたのである。⁽⁴⁵⁾

ところで、光復された襄陽は、いうまでもなく内外の反革命から防衛されねばならなかった。この時、すでに湖北の各地は光復されており、漢口・漢陽の清軍もこの地方まで手をのぼすことはできなかった。當面のもっとも重要な外敵は隣接する南陽の謝寶勝であった。謝寶勝は光化が光復されるや、卽座に鎮壓に乗りだしてきたが、これは江湖會に指導された光化の革命軍の反撃を蒙り、目的を果たすことはできなかった。⁽⁴⁶⁾ 十二月初旬には河南省西南部の蜂起軍の南陽進撃も傳えられ、また兵士の間に不服従の風潮が広がつたため、謝寶勝もその後は、大規模な攻撃はできないようになった。⁽⁴⁷⁾ したがつて、襄陽の革命指導者にとつて重要だったのは、外敵よりもむしろ内部の敵との闘いであつた。軍政分府内部には司令張國荃に率いられた會黨の一派、いうならば司令派と分都督黃仁葵を頭とする紳士地主・商人の一派、いうならば都督派の二勢力が共存しており、前者が多くの曖昧さを含みながら、人民の利益を代表していたのにたいし、後者は明確に舊來の支配階級・有産階級の利益を代表していた。そしてこの兩派は、清朝支配を拒否したということのみ共通點を有して共に軍政分府を構成していたのであつて、もし會黨の指導者たちが墮落しないとすれば、いつかは一方が他方を壓倒しなければならなかったのである。

まず兩派の最初の對立は膨れあがった軍事費の財源をめぐる發生した。軍政分府の創立から翌年二月の廢止に至るまでの支出は總額十九萬餘緡といわれ（實際はもっと多かつたであろう）、そのうちの八割を軍事費が占めていた。一方、収入としては、清朝の各署局の備蓄が約十一萬餘緡、逃亡した道臺喜源の沒收財産が約五千緡であつた。不足を富豪の寄附に頼ることにしたところ、申し出の總額は三十餘萬緡に達したにもかかわらず、實際に集まつたのはその十分の一にすぎなかつた。⁽⁴⁶⁾つまり、會黨の軍隊の制壓下にあつたので、有産階級は、口では革命に賛成しながら、實は革命に反對するという、あの反革命の二面派の手口でもって財政面での支持をサボタージュしたのである。その際、軍政分府の財政局軍需科もかれら紳士が掌握していたのであるから、かかる抵抗はきわめて容易であつたろう。⁽⁴⁷⁾

このように財政の缺乏は明白であつた。しかし、武昌からの援助もすぐには期待できず、さりとて人民の收奪に頼るといふわけにもいかなかつた。⁽⁴⁸⁾この危機を克服する方法は、富豪から強制的に寄附金をとりたてる以外にはなかつたので、張國荃はその方法に頼ることにした。たとえば、かの革命派の巨頭で本來の蜂起計畫では光復後の湖北都督に豫定されていた劉公の家からも、二度にわたつて毎回一、二千串錢を取りたてた。もつとも、四房を合せて約一萬二千畝の大地主であつた劉家にとつて、これは大した負擔ではなかつたのであるが。⁽⁴⁹⁾また、均州第一の富豪は、要求された三十萬緡を納めなかつたため、張國荃に派遣された軍官周鳴岐によつて財産を沒收され、穀城の地主たちは會黨海鳳山の支配を恐れて逃亡してしまつた。⁽⁵⁰⁾このような事態は、各地で多く見られ、かくすることによつて、はじめて革命軍の軍費は捻出されえたのである。

とはいえ、有産階級は自分たちにむけられた收奪にけつして甘んずるものではなかつた。しかし、かれら都督派に決定的に缺けていたのは、他ならぬ軍事力であつた。當時、かれらが完全に掌握していたのは、おそらく、光復時に一時撤廢され、後また保安社と改名して復活した團練ぐらゐであつた。⁽⁵¹⁾しかし、百人前後の團練の力で張國荃の部隊に對抗しえないことは明かであつた。そこで、かれらは新たな手口を弄して、十二月下旬、紳士たちによつて構成される軍事參議會を組織し、軍事費についてはここで協議することにした。これは上述の二つの勢力の間の和解しえない矛盾を調整するものとして構想された機關

であつたが、決議の力が軍隊の力に及ぶはずもなく、ほとんど成果をあげえぬまま、一カ月あまりで撤廢されてしまつた。⁽⁵⁴⁾

しかしながら、張國荃・李秀昂らに指導される會黨勢力も、みずからの軍事力の確立とその財政的基盤を富豪からの收奪にもとめること以上には、前進することができなかった。とりわけ政治的激動の時期にあつては、事態の進展に即して前進しえないなら、いかなる社會的勢力もかならず後退運動にひきずりこまれるものである。この襄陽光復を擔つた江湖會も、その後、日を経るにつれて、外的要因から變容を迫られただけでなく、内的要因からも自壞の道に陥ちこんでいくことになつた。すなわち、江湖會は、光復後、黎元洪の策略によつて武昌の同胞社の分社にされ、公然活動が保證されたのはよいが、その結果、紳商等の投機分子の加入があいつぎ、組織が變質したばかりでなく、獨立性を失い、自由な活動を制限されて、被抑壓者の組織としての本來的な力を失つていつた。⁽⁵⁵⁾ さらに悪いことには、かれらには政治的訓練が缺けていたため、政權奪取後、一部に大衆の利害のために奮闘するよりは、私的な利益の追求に走る傾向も出てきたといふ。⁽⁵⁶⁾ かくして、江湖會は、廣範な農民にはもちろん都市貧民にたいしても、長期的な展望をもつた革命的措置を講じえないまま、しだいに墮落していく危険に曝されることになつた。つまり、かれらは、人民の革命的エネルギーの爆發に依據して既存の政治的支配體制の打倒には成功したが、そのエネルギーを有効に組織してより深部の社會經濟的關係の變革にまで突き進みえないまま、自ら變質しつつあつたのである。これは、會黨という封建的な組織にとっては、むしろ當然のことであつたが、その結果、張國荃の率いるこの軍隊は、人民と敵對するとまではいえないにしろ、人民の支持を失つて孤立するという狀況に直面させられることになつた。かくては、江湖會の政權は、より大きな軍事力をもつ有産階級の部隊と對決すれば、必ず敗れる位置にたち到らされたのである。

四

襄陽における江湖會の政權は、いずれは崩壞させられる運命にあつたのであるが、この政權を破壊する反革命的な歴史的使

命を擔ったものは、ほかならぬ所謂革命派であった。これよりさき、湖北軍政府は、漢水流域の制壓を計畫していたが、漢口陥落後、日知會時代の革命家で革命派のあいだに信望のある季雨霖を安襄鄖荆招討使に任命し、その方針の實行をはかった。十一月二十日、襄陽光復のまえに招討軍は武昌を出發した。⁽⁵⁷⁾この時すでに武漢の戦線は緊迫し、漢陽も危いという状況であったため、その隊伍は計畫よりはるかに縮少され、歩兵一營と先鋒隊のみという程度であった。季雨霖は進軍して仙桃鎮に至り、二十四日、ようやくそこで招討使行署を組織した。⁽⁵⁸⁾やがて漢陽も陥落し、招討軍は、その敗殘兵および漢陽陥落のあおりをくって動搖した漢川・京山等の革命派の軍隊を吸収し、ようやく旅團規模の編成をみるにいたった。この招討軍は、張難先・梁鍾漢・李亞東を顧問に据え、かつて襄陽で蜂起を畫策した章裕昆らが参加していたことからも明かなように、文學社・共進會等に屬する當時のブルジョアジー・小ブルジョアジーの革命派が實權を握った軍隊であった。

十二月六日、招討軍は沙洋に進んだ。その時、荊州攻撃中の唐儀支より援軍の要請があり、それをうけて招討軍は二路并進の策をとることにした。本隊は荊州へ赴き、高仲和の率いる先遣隊が襄陽へ向うことになった。ところで、襄陽はこの時すでに光復されていたのである。それにもかかわらず招討軍が速かに襄陽へ進軍せねばならないとする理由を、この革命派の軍隊は、「張國荃・黃仁葵が襄陽を占領し、軍費をその地方で調達している。人民はその擾しさに堪えず、襄樊の人びとは武昌の蜂起軍が襄陽にやって来るのを望んでいる」という點に求めた。⁽⁵⁹⁾しかし、張國荃は富豪から軍費を調達していたのであるから、招討軍が襄陽の「擾わしさに堪えない」「人民」のために進軍するということは、當地の有産階級を救援していくこと以外の何物をも意味しなかった。ところで、かかる意圖をもって襄陽に赴いた高仲和の先遣隊は、張國荃の軍事力に指一本さすこともできなかった。一方、張國荃は高仲和にたいして、十分な警戒心をもって接したが、けっしてかれを驅逐しようとはしなかった。そうこうする間に一九二二年一月二十三日、荊州攻略を終えた季雨霖の率いる招討軍本隊が襄陽に到着した。⁽⁶⁰⁾

これよりさき一月十六日に、黎元洪は權力を集中するために軍政分府の名稱を取消す命令を出し、襄陽の政權を制度的に下屬させた。⁽⁶¹⁾そこへ中央から派遣された季雨霖が到着したので、黃仁葵は辭職し、季がその權限を受けついで。⁽⁶²⁾いうまでもなく、

この地の有産階級は、旅團級の兵力を有する季雨霖に希望を託した。實際、高仲和自身がいうように、棗陽においてかれは、張國荃が寄附を命じた大地主のために、張の徴收員を追いだしたばかりではなく、その地の張軍を解散して自軍に編入することによって、かれらの期待に應えた。また、かの穀城の海鳳山は季雨霖の謀計にかかって殺されるというようなことも発生した。海鳳山が殺されるや逃亡していた地主たちが歸ってきて、蜂起者たちを虐殺し、舊來の搾取秩序を回復した。⁶⁴このようにして、季雨霖の率いる革命派の軍隊は、沙洋において設定したあの反革命的な襄陽進軍の目的を露骨に實現していったのである。

しかし、季雨霖は、張國荃の襄陽・光化の支配をすぐには覆えすことができなかった。そこで、かれは張軍の指揮官のあいだに分裂を作りだしたり、有力な指導者を暗殺したりするなど、きわめて悪質な手段を弄することによって、張國荃の勢力を削ぐとした。⁶⁵さらに季雨霖は、黎元洪から「各部隊の冗兵に手當を與えて解雇し、鐵砲一丁あたり兵士一人にして、素手の兵士は全員解雇せよ」との命令があつたのに乗じて、裝備の悪い張軍の人員を削減し、張國荃の支配力を弱めようとした。この陰謀にたいして、とりわけ斷固として反對したのは協統李秀昂であつたらしいが、二月八日、李は季雨霖のテロルによって殺害された。その後、樊城駐屯の李秀昂の一協は季雨霖の配下に編入された。⁶⁷翌日には、均州の蘇清泉の財産を沒收したかの標統周鳴岐が老河口で處刑されたという噂が襄陽で流れたし、⁶⁸また二月十八日には前述したように海鳳山が殺害され、その軍隊が解散された。このように安襄鄖荆招討使季雨霖は襄陽において張國荃の軍隊を「招討」したのであるが、この過程のうちに、既存の支配権力が打倒されると同時に矛盾關係は變化し、かつての革命派も人民に背をむけるかぎり、反革命勢力に轉落せざるをえないという、きわめて冷厳な歴史の現實をみてとることができるであろう。

李秀昂の殺害は張國荃にとつても打撃であつたらしく、二月十一日、かれも季雨霖の命令に従つて北伐に出發した。北伐軍が南陽に進撃した時、清朝退位の上諭が下り、張國荃はふたたび襄陽にひきかえした。しかし、このころには會黨の精神的墮落はますますひどくなり、かつて何義茂が襄陽光復の前夜に紅幫の祕密會議で「滿清は打倒されなければならぬ、われわれ

紅鬻の仲間は今や陽の目を見る日がやってきたのだ」と演説した⁽⁶⁹⁾、あの進取の氣性はほとんど失われつつあった。張國荃配下の軍官の多くは、「政治の面であつたのみが見えはじめ、積極性と計畫性を失つた」ばかりではなく、「しよつちゅう集つては、政治を談ぜずに、終日、酒色にふけて暮らしてゐた⁽⁷⁰⁾」というから、會黨の否定的側面がむきだしになり、非會黨大衆からますます遊離しつつあることは明かであつた。このようにして、襄陽光復後數カ月を経たころには、かつて人民の壓倒的な支持を得ていた張國荃の軍隊も、いつの間にかほとんど孤立無援の状態に追いこまれてしまつたのである。

三月十日、季雨霖は黎元洪の命令に従い、部隊を率いて武昌へ歸つていった。これは、和議が成立したにもかかわらず、大軍擴を行つて湖北の地盤強化をねらつた黎の措置に従順に従つたものであつたが、季雨霖という敵對者が去つたことによつて、張國荃の支配がふたたび強固に確立されるかにもみえた。しかし、まさにその時、革命派としてはより聲望の高い劉公が、三月二十日、北伐招討左軍を率いて襄陽に進駐してきた⁽⁷¹⁾。季雨霖の後をうけて、當地の大地主でもある劉公は襄陽に到着するとすぐに有産階級のために張國荃の軍隊を破壊しようとした。ただ、劉公の北伐は、黎元洪がかれの勢力増大を恐れ、北伐招討左軍司令なる虚銜を與へることによつて武昌から追いはらつたというのが、その實情だつたので、この北伐招討軍の力量は大したものではなく、當初は張國荃軍の方が優勢だつたらしい。しかし、張國荃から攻撃をかけるというようなことはなく、逆に劉公はその間にも一部の會黨を利用して自軍の擴充と張軍の分裂をはかつたのである⁽⁷²⁾。實際、張國荃の一派は、當時ではまだ劉公すなわち革命派が自分たちにとつて階級的にはいかなる關係にあるのかを理解しえず、「劉公と自分たちはともに革命をやる者で、みな漢族のために戦つてゐるのに、どうして一致協力しないで、おたがいに秘策を盡して鬭い、奪いあいをするのだらう」という程度の認識だつたので、それしかたのないことであつたといえよう⁽⁷³⁾。

そこへ、さらに黎元洪が、かれのもつとも信頼する第六鎮統制王安瀾配下の周景亞の部隊を襄陽に派遣してきた。張國荃は、武昌に派遣した調査員からの報告で周景亞來襄の眞の目的がかれの軍隊の改編にあることを知り、六月十九日、周を殺害した⁽⁷⁴⁾。かくして、張國荃は前門の虎を追いはらうのに成功したかのごとくにもみえた。しかし、中央から派遣されてきた周景亞の殺

害は、それまで張のもとで職務についでいた毛伯屏らの青年學生たちに會黨の「でたらめぶり」に愛想をつかさせる契機となり、その結果、張國荃はいっそう孤立した地位に追いこまれることになった。この好機を利用して、六月二十七日、劉公は後門の狼よろしく張國荃を襲い、張軍を襄陽から驅逐した。⁷⁶かくして、武昌蜂起の當夜に逃亡していたため湖北の都督になりそこねた「革命」派の巨頭劉公が、いまや小なりとはいえ、襄陽地方に君臨することになったのである。

ところで、襄陽の大地主であるこの劉公の軍隊の勝利をとりわけ歓迎したのは、當地の「富豪紳商」であった。富豪の夫人連中にいたっては、劉家の夫人と「姉妹會」なる組織をつくって、もつとも熱心に劉公の勝利を願っていたという。⁷⁷このように有産階級からは喜ばれたにしても、この「革命」派の軍隊の勝利が人民にもたらしたものといえ、⁷⁸「左軍が住民を劫掠すること、數百家の多きにおよんだ」といわれたように、まったく反革命的な略奪だけだったのである。⁷⁹もつとも、歸郷するやまず父母を訪ねて大邸宅を改修し、トーチカ四座を築いて一營の兵士に護らせたような男にとつて、革命とはこのようなものと考えられていたのかも知れないが、それにしても、これは、貧民出身の張國荃⁸⁰に率いられた會黨の軍隊が、ほぼ一貫して人民にたいしては規律を守り、最後に老河口へと敗走する際にも當舖一家を掠奪したにすぎないと傳聞されているのとは好對象をなす出来事ではあつた。⁸¹

劉公の支配が襄陽において確立されたことは、黎元洪にとつては好ましいことではなかつたので、黎はかの王安瀾の配下の部隊を派遣して劉公を監視させた。そして、その後、黎元洪は、劉公を袁世凱の中央政府の高等顧問にまつりあげて劉公を襄陽から去らしめ、數千人を數えるかれの軍隊を自分の統率下に收めることに成功した。⁸²かくして、襄陽は黎元洪の支配に歸したが（黎の支配下で、劉公の支配下以上の會黨にたいする苛酷な彈壓がなされたことはいうまでもない）、有産階級にとつては、自分たちの財産が守られ、搾取の秩序が維持されさえすれば、劉公であれ、黎元洪であれ、だれがこの地方の支配權を握ろうと拘わるところではなかつた。そして、湖北を支配することに成功した黎元洪は袁世凱の支配に服し、ここに革命に託した人民の希望は無殘に踏みにじられ、以前にも増して暗黒な北洋軍閥の支配へと、時代は移つていったのである。

五

武昌蜂起に始まり、數カ月にわたって革命的人民また革命派ブルジョアジーの血で闘いぬかれた辛亥革命は、あまりにも長くつづいたがゆえに不變不動の觀を呈していた、改良主義者がけつして攻撃しえなかつたところの専制王朝支配を打倒することに成功した。しかし、革命派ブルジョアジーが、人民に背をむけてむしろ革命的人民を彈壓虐殺し、立憲派また反動派にもたれかかつていくことによつて、結局のところ、袁世凱という帝國主義の傀儡、反革命軍閥政權の一時的な勝利でもつてその幕を閉じることになつた。袁世凱政權が全國的規模において確立された背景には、湖北における黎元洪の支配の確立があり、光復された他の省でも多かれ少なかれ、本質的には湖北と同様の事態の展開がみられた。そして、黎元洪の支配が確立されるにあつては、いささかでも人民的な性格を有するすべての武裝が根絶されねばならなかつたのであるが、江湖會に指導された襄陽の張國荃の部隊が破壊されていつた過程はまさにその一つの典型をなすものであつた。プロレタリアートが向自的な階級として形成されていなかつた二十世紀初頭の半植民地中國において、ブルジョア革命としての辛亥革命に果せられた歴史的使命は、ただ封建的専制支配を打倒して、帝國主義の世界支配により適合的な買辦的權力の創出にあつたのであつて、革命派ブルジョアジーの理論どつりに民權・民生の保證された共和國を樹立することは絶對に不可能なことだつたのである。そして、かかる買辦的權力による支配體制を支える經濟的基盤として、すでに見通しを述べておいたように、⁸³ここ襄陽においても、買辦階級の著しい成長に集中的に表現される社會經濟的變動にともなう地方權力の再編成がみられたが、⁸⁴それについて論ずるのは、別の機會にゆずりたい。

この襄陽の地にかぎらず全國的にも、當時において中國人民は、同盟會に代表される革命派ブルジョアジーかあるいは前近代的な祕密結社である會黨以外の革命を指導する政治的集中をつくりだすことができなかつた。しかし革命派といつても、そ

の多くは、紳士・地主・商人等、舊來の支配階級に出自するもので、かれらは既存の不合理な支配體制にたいする反對派ではありえても、それ以上に踏みだすことはできなかった。⁽⁸⁵⁾このような階級的基盤に制約されていたかれらは、政權を奪取したのちに、人民に背をむけて舊來の支配階級と權力を分有し、軍閥支配への道を掃ききよめる役割を果すことになったのである。孫文に代表される眞の革命的民主主義者を除けば、當時の革命派の多數は、自分たちが新しい共和國を統治するのだと思い、自らの階級的立場に即して革命の内容を考えていたので、ここ襄陽における劉公の果たした役割に典型的にみられるように、かれらの階級的利害を損うものとは鋭く對立して容赦ない彈壓を加えた。その結果、既存の支配體制の崩壊にともなう矛盾關係の變化に應じて、「革命」派が反革命の一翼を擔うことになり、それまでは歴史發展の推進力であったものが、逆にその阻害要因に轉化することにもなったのである。

一方、この江湖會のごとき會黨は支配の對極にたつ被抑壓人民大衆によって構成された集團であつたが、かれらには、人民の不滿を集約して支配權力を打倒する力はあつたにしろ、革命を徹底的にやりぬき新たな人民の政權を組織する能力はなかつた。襄陽光復を擔つた江湖會も、政治的大激動のなかで昂揚していた人民の革命的エネルギーを軍隊に編成し、明確な反革命である清朝支配に對決することまではなした。しかし、かれらは、その支配を支える眞の社會經濟的基盤の破壊、すなわち土地を中心とする生産手段そのものの收奪にまでは進みえず、富豪にたいする軍費の割りつけにみられるように、舊來の收奪者の收奪物を再分配するにとどまつた。そして、かれら自身の政治的未熟の代償として、装いも新たな反革命である、「革命」派の劉公また「革命」の白旗を掲げてはいるがまさに反動そのものの黎元洪によって紛碎されることになってしまつた。かくして、ここ襄陽の人民も、魯迅の描いた阿Qの革命にたいする希望と絶望と本質的には同じ軌蹟をたどる挫折感を味いながら、北洋軍閥の暗黒支配に服することになり、その抑壓・支配に抵抗するなかで、人民の解放を眞に擔いうる前衛の登場を準備していったのである。

注

(1) 顧祖禹『讀史方輿紀要』湖廣方輿紀要序「湖廣之形勝、在武昌乎、在襄陽乎、抑在荊州乎。曰以天下言之、則重在襄陽。以東南言之、則重在武昌。以湖廣言之、重在荊州也。」

(2) たとえば、湖北の革命についても詳しくとされる『湖北革命知之録』でさえそうである。しかし、襄陽の江湖會の蜂起について、三百餘人の老人からの聞き書きよりなる華中師範學院歴史系中國近代史組調査小組『辛亥革命時期鄂北江湖會起義調査資料彙編』(一九六一年調査、刊年不詳)が編まれ、多くのことが明かとなった。以下、この資料を『江湖會資料』と略稱する。

(3) 反革命分子黎元洪は、都督にかつがれてからも、大官柯逢時と結んで「如革命成功、黃坡保衛柯之身家、清廷如恢復、則由柯保衛黃坡之身家」(謝石欽「樗公隨筆」、『近代史資料』總二五號所收)との逃げ道を作っていた。かかる人物が都督になったため、裏切り者が登用されて漢口の敗戦を招いたり、國家的損失を避けるという理由で清の軍艦にたいする砲撃が禁じられるなど、革命は重大な被害を蒙った。

(4) 張玉衡「辛亥革命襄陽見聞録」(『近代史資料』總三一號所收。以下、張玉衡前掲資料というばあいは、これを指す)「八月二十三日(陽曆十月十四日)……連日傳説本省有兵變……八月二十四日……錢價已到五十八九兩、驟退五十二兩、官票不流行、各錢店紛紛兌錢、聞官錢局不能支、只准兌一串、多則不發……八月二十九日、……粘米前日價八百零、今驟漲至壹串壹百文。」張難先「湖北革命知之録」、章裕昆「文學社武昌首義紀實」などでは、十月十三日(舊曆八月二十二日)に紙幣風潮が発生したと記している。なお引用資料中、()で示したものは筆者が加えたものであり、原文にある挿入は「」で示して、區別した。

(5) 章裕昆「文學社武昌首義紀實」六二頁。「於是、更商進行方略。……章見巡防營無法鼓動、又向馬隊管帶孫長齡陳說利害、……孫伴應

辛亥革命時期の湖北における革命と反革命

之、暗派心腹將子彈繳於喜源、並獻策分散馬隊。章知事不可爲。」

(6) 梁漢瀾「我參加革命的經過」(『辛亥首義回憶錄』第二輯)「敵軍劉溫玉、於九月初三(十月二十四日)率五營之衆、由襄河上游水陸而下、被我軍與劉英的隊伍、包圍抄襲、擊敗于仙桃鎮。」

(7) 『江湖會資料』一二頁 肖明山口述「紅幫又稱洪門、……其組織和活動均絕對祕密。革命宗旨主要是興漢滅滿、恢復漢族江山。……而尤其講究義氣、處處模倣梁山好漢和劉關張桃園三結義。正因爲他們講究江湖義氣、所以一般人管它叫江湖會。」なお、肖は當時、紅幫の一員であった。

(8) よくいわれるように、「蓋散則爲民、集則成夥、當時之所謂『會匪』、實際上都是人民」(蔡寄鷗『鄂州血史』二七頁)であり、江湖會には、老河口の「土農工商都有很多人參加」(『江湖會資料』一一頁 徐大成口述)とされたが、ただ光復以前には「老河口的資産階級最沒有人加入江湖會」(同右一二頁 李文峯口述)であったといわれる。また、その指導者には壓倒的に貧民が多かった。

(9) 『江湖會資料』一五頁 李文峯口述「到了宣統二三年、駐老河口的清軍士兵加入江湖會的日常、覺悟也有了很大提高、同情與主動靠攏革命的更多。但軍中會黨自恃有武裝可恃、活動幾乎成爲半公開、因而黃書南(仁荃)得以將宋才娃・周志娃逮捕。」

(10) 尙秉和「辛壬春秋」第三「初、光化縣河口鎮、駐巡防馬隊及水巡數百人、陸軍二十人。」「江湖會資料」一六頁 郭德勝口述「老河口原有巡防步兵一營、巡防水師營有二十隻船、士兵兩百人左右、巡防馬隊一百多人馬。」

(11) 毛拔「襄陽光復記」光化篇(『近代史資料』總七號所收)「當警電初至、民心惶惑、崔澤奸徒、蠢然欲動、仁荃憂之、急檄四鄉紳耆練團自衛、復召集河口紳商語之曰『武昌肇變、詭言繁興、必有乘風剽劫、擾亂市廛者、河口防兵單弱、不足備非常、盍仿漢口商團成式、募勇丁數百名、……如是則匪徒不敢逞、而君等生命財產、可保無虞。……』時鎮商亦亟思自保、聞言皆鼓掌稱善、即日署名認捐、得錢萬餘

實。……不數日商團成立、舉巡防馬隊管帶周飛鳳兼統之、屹然爲一軍。……商團成、有兵無械。……仁莪電請截留快槍一百二十桿、子彈七千顆在縣、以備巡警採用。」

- (12) 『江湖會資料』一八頁 葉善清口述「老河口組織了二三百人之商團。……尤其是所招募士兵、多系紅幫成員。李秀昂・張國荃等到老河口後、在江湖會串聯組織下、商團士兵積極參加了江湖會所領導的起義、完全出乎黃書南的意料。」

- (13) 『江湖會資料』一七頁 李文峯口述「黃仁莪呈襄陽道請兩陽鎮臺留兵兩營協防河口。謝鎮臺將李占督一營約四五百人留駐河口。……而江湖會李秀昂等也在南陽客軍士兵中加緊進行策動。……南陽軍李管帶害怕所部士兵傾向革命、軍心不固、……在緊要關頭却將所部移駐鄂豫交界處的光化孟化樓。」

- (14) 『江湖會資料』二八頁 毛伯屏口述「雖然紅幫的革命宗旨也是『興漢滅滿』、但是這裏的紅幫與同盟會沒有正式聯系、在軍類里彼此還通氣、至於在社會上就彼此不通消息了。李秀昂・張國荃他們搞起義、事先跟同盟會沒有聯系、只是跟軍隊里的紅幫有聯系。當時他們那個班里就有四五個是紅幫分子。……他們起義光復襄陽後、原留駐襄陽的新軍馬隊中許多革命黨人文學社社員和共進會會員都不贊成江湖會起義、大多數跑回武昌去了。其中有隊官排長文書等、先後一共走了好幾十至百多人。其中留下了家眷在襄陽的、後來連家眷也接走了。正因為他們都在襄陽光復時走了所以他們在軍政分府和總司令部中都沒有擔任什麼重要任務。」ところで、この事態について、章裕昆の前掲書等、革命派の記述はきわめて曖昧である。

- (15) 『江湖會資料』四七頁 毛伯屏口述「我們革命派原來只想利用這些無知識的人、造起革命聲勢、達到革命的目的。」因みに、毛伯屏は地主家庭出身の學生で、光復後は軍政分府の參謀處の參謀となった。かれは文學社・共進會等のセクトには屬していなかったようである。
- (16) 『江湖會資料』一七頁 唐德興口述「他們爲避免官方耳目、行動很是隱蔽、每次分來河口鎮上都是三三五五、分批進城、進城後、牲口

都分散拴在東西街各種行的後頭。他們經常在街上宣傳說：『同胞們、漢人要出頭了、我們不能給滿人當牛馬——』并且同本地巡防營及巡糧營的人都秘密接通了聯系、準備起事。」

- (17) 『江湖會資料』一九頁 申柏年口述「大約將近中午時分、張國荃等人率領馬隊來到邢家、當即把全部官員們都架了出來、強迫他們宣布反正。」

- (18) 『江湖會資料』二〇頁 程茂榮口述「江湖會有好幾百人在街上喊『推到滿人、漢族是同胞』的口號。」同右一九頁 申柏年口述「他們押着官員們從邢家出發。……沿途高呼『興漢滅滿』的口號、并聲音『大隊到了。』」同右一九頁 傅雲亭口述「這時起義大隊人馬已在街上游行、并鳴鑼安民、高喊『保商保民、公買公賣、不准擡高市價。』」

- (19) 『江湖會資料』一九頁 夏大順口述「老河口起義時、滿街有人喊、『大隊到了、快扯白旗。』當時我也上街看熱鬧。」

- (20) 『江湖會資料』一九頁 申柏年口述「張國荃等鑒於周祥謙不服、爲防止在移交軍隊時發生變化、因而佯言請周管帶高陞帶頭、讓周騎馬走在前頭、李秀昂就從後面開槍把他打死了。他們打死周祥謙後、到城外寶陵寺順利地接收了全部軍隊及其裝備。」

- (21) 『江湖會資料』二〇頁 李文峯口述「起義那天、打死周祥謙後、駐老河口部隊和地方的江湖會代表以及地方官紳齊集官錢局開會。……各代表磋商後、交即以湖北軍政府襄陽軍政分府光化軍務部的名義出示安民。告示由李秀昂簽署。告示內容是『光復漢族、驅逐隗虜、興漢滅滿、保商保民。』同時鳴鑼宣布變正。下令剪髮、命各商店照常營業、懸掛白旗歡慶革命勝利。」なお、光化および襄陽の光復に際しては、辛亥革命當時、全国各地でみられた辮髮を暴力的に剪つてまわるという、あの種の騒動はもちあがらなかったようである。
- (22) 『江湖會資料』二〇頁 左靜波・張輔臣・陳鳳章口述「打死周大人後、由洪幫張進香……等自治老河口、由一位姓典的副官具體負責維持治安。」同右二〇頁 李文峯・閻石君書面材料「老河口起義

那天、『江湖會』的各部分代表在商務會開會、決定一面出示安民、一面擴軍、招募兵馬、一共成立了十個營、這時江湖會首領如何義茂、宋才娃・崔義茂・周志娃和甘國棟等都正式出面成爲管帶、或任隊官。』尙秉和『辛壬春秋』第三『國荼擊飛鳳斃之、即召集兵警、謀率師攻襄陽。衆以兵寡爲慮。國荼曰、兵貴速不貴多。即夜募新兵、二百人合六百人、率以往。』

(24) 『江湖會資料』二二頁 郭德勝口述「此外、大量招募了新兵、經過紅幫大爺們大力號召攻打襄陽、參軍的人很多、其中大都是紅幫弟兄。這些人是城里的下流人、有無業游民和從鄉下來的農民。」

(25) 毛拔前揭書襄陽篇「喜源以滿員備兵其間、與荊州駐防相倚角、初聞省變、頗以防守自任、嘗電達內閣、言襄陽重地、擬練兵十營、以備戰守、請由中央撥濟軍餉、復電允之。」しかし、實際には中央からの軍餉は届かず、實效をあげえなかつた。

(26) 張玉衡前揭資料「八月二十五日(陽曆十月十六日)……喜觀察請楊廉翁……進署議事、辦團練也。九月初六日(十月二十七日)……十點鐘關縣紳董齊集昭明臺、議辦團防。計已定議者、八甲七十二團、首事壹百三十餘名、言明派我作書記。」

(27) 毛拔前揭書襄陽篇「都督黎元洪與溫玉有舊、素電勸其處置喜源、估領襄郡。溫玉……反以其事語源。源由是志志不自安、外雖依之、而陰懷疑忌、溫玉不知也。然襄陽自是益岌岌矣。」

(28) 『江湖會資料』二四頁 陳明珠口述「辛亥年襄陽光復前夕、……城守營的士兵都是掛名的、每逢道臺來點名、統領就錢臨臨時去僱些賣柴賣菜或是挑糞的人來應付、每人給五百錢。事罷、各自散去。」なお、陳明珠は、當時巡防步兵營の兵士であつた。

(29) 『江湖會資料』二三頁 毛伯屏口述「武昌首義後、很多鄂北學生紛紛返襄。如留日的……、由省返襄的……一共七人、這班青年學生都是地主階級和資產階級出身、自費上學。回襄後、即與襄城東門外的馬隊取得聯系。我們還曾在回襄的當天夜晚、在街上張貼革命標語、并把標語貼到道臺衙門的門首。於是道府當局慌了、立即命襄陽各校

停課、將學生解散回家。由於當時襄陽局勢也動蕩不安、風聲鶴唳、雖然嘗編謠傳武昌返襄的學生帶有炸彈、喜源・劉溫玉及曹守魏令等十分害怕、因而不致逮捕我們。而喜源逃走之後、曹守魏令就更加害怕我們了。」

(30) 『江湖會資料』二三頁 王錦如口述「在襄陽光復的前一天晚上、紅幫大爺何炳坤(何義茂)帶了老河口的幾十個弟兄、從老河口趕來樊城、當晚來到我家、在我家店舖後面小花園里開會、商量如何內應、接應江湖會進攻襄陽的部隊。會議開了一個通宵。」同右二七頁 鄧竹仙口述「襄陽光復前夕、城里治安很混亂。幸虧不久、李秀昂他們光復了襄陽、軍隊紀律復嚴。」

(31) 毛拔の『襄陽光復記』襄陽篇では「取襄陽之師才三百人」といい、また『江湖會資料』二五頁 周宏彬口述によれば「李秀昂・張國荃等、……只有二・三百杆槍(馬隊未進襄城、直接進樊城)。」とある。註(23)所引の『辛壬春秋』にいう六百の隊伍の半數前後がまず先鋒隊として襄陽を攻撃したのであろう。

(32) 『江湖會資料』二二頁 李國鈞口述「喜道臺聽到張國荃馬隊反正、把財物藏在當舖(或天主堂)就逃走了。」

(33) 『江湖會資料』二五頁 周宏彬口述「其時團總楊濂溪正在查城、見李秀昂等已爬城進來、滿城盡掛白旗、便叫我到總局去取小北門的鑰匙把城門打開。」なお、『襄陽光復記』では、これを黃仁葵の仁德のおかげであると書いているが、仁德はともかく、黎元洪の都督就任が各地の反革命勢力を大いに安堵させたのと同様の影響力を黄もこの地で持ちえたであろうことは、容易に想像できる。

(34) 『江湖會資料』二六頁 李國鈞口述「當時襄樊人民……唱着這樣的順口溜『天天望大隊到、大隊帶着開花炮、先據襄陽府、再打謝老道(謝寶勝)』」同右二六頁 王學詩口述「起義軍進城後、老百姓家家都扯白旗、表示歡迎、流傳着『白旗一招、獨立漢江邊』——不滅滿洲、縱死心不甘」等歌謠。」

(35) 毛拔前揭書襄陽篇「義軍入城後、與軍民約法、即組織軍政機關、集

紳商軍學界會議於昭明臺投票選舉、仁葵得七十餘票、爲襄陽軍政分府管理民事、國葵得六十餘票、爲分府司令部管理軍事。……設會議廳、常會月六次、特別事則開臨時會議、從多數取決。」なお、黃仁葵・張國荃が正式には、都督・司令と名乗ったことは、『黎副總統政書』に收める文書からも明かである。

(36) 毛拔前揭書南陽篇「仁葵復移書（於謝寶勝）曰、『……惟是潮流傾洞、長亂種因、匪伊朝夕、仁葵仕學有年、今日之舉、非爲仇滿、實以保民耳。……』」

(37) 毛拔前揭書軍事篇「軍府成立、乃設法招集之。合光化舊軍及下游來襄投效潰卒、與各屬起義軍從新編成爲三協。以一協駐郡城、許鴻鈞統之。以一協駐樊城、李秀昂統之。以混成一協駐老河口、黃振遠統之。而國荃爲總制。其舊有水師、亦改編二營、以黃裕斌統之、分駐襄樊河口一帶。」

(38) 『江湖會資料』三三頁 李萬順口述「張國荃光復襄陽後、這里的紅幫大爺幫助他招兵。生活困難的貧民都勇躍參軍。」同右三三頁 李國鈞口述「張國荃招兵時、有很多百姓參加、他們都是推車的、種幾畝課田的或是做小生意的。在襄城就有不少的人參加。」同右二七頁 李萬順口述「襄陽的人民、不等招兵、就積極自動的投入戰鬥行列。等到招軍時、報名的絡繹不絕。有些老頭子也來參軍、唯恐不被錄取把鬍鬚也剃掉了。」同右一九頁 李國鈞・彭仁貴・王學詩口述「起義軍進城後、剪辮子放監獄、大部分囚徒都參加了張國荃部隊、有一部分被團保局和管監獄的軍隊打死了。」

(39) 『江湖會資料』三三頁 李萬順口述「新招的軍隊、軍官由士兵選舉、拾人舉一名什長、一排人舉一排長、每隊舉一隊官。」同右二八頁 殷叔良口述「各級軍官（到排長止）幾乎都由馬隊弟兄擔任。」同右二〇——一頁李文峯・閻石君書面材料「老河口起義那天、『江湖會』各部分代表、……決定……擴軍、招募兵馬、一共成立了十個營、這時江湖會首領如何義茂……等都正式出面、成爲管帶、或任隊官。」

(40) 『江湖會資料』三四頁 馬岐發口述「穀城是在十一月三十日夜間十

二點鐘起義的。」毛拔前揭書襄陽篇「穀城……縣民海鳳山（紅幫）開河口兵起、即率團兵倡議反正、……知縣張肇芳繳印仍留任。」

(41) 毛拔前揭書襄陽篇「南漳有鎮曰武安堰、市廛頗盛、先有防營駐紮、共推藍古廷爲首響應義軍、……（知縣夏）紹範暨旗繳印仍留任。……宜城令吳文炳、聞襄陽已定、即具書遣自治會董彭用熙詣府請兵彈壓。……仍檄文炳視事。均州……檄到、知州陳文琪、即傳諭紳民、暨旗反正、……文琪換印視事。」

(42) 『江湖會資料』三八頁 榮光耀口述「襄陽光復後半個月光景、大約一九一一年十二月（辛亥年十月下旬）、棗陽也光復了。」毛拔前揭書襄陽篇「棗陽接壤應山・隨州、與鐵路北兵相距最近、知縣瞿長齡瞻顧不敢暨旗、……至十一月停戰議款、長齡始詣府繳印。」

(43) 『江湖會資料』三〇頁 李萬順口述「古樓（即昭明臺）會議後的當天下午、張國荃部下在原襄陽府衙門前排上許多桌子、豎起白旗、叫所有道府各官吏前來畫押、表示歸順革命、襄陽官紳都來畫了押、絡繹不絕、許多市民、爲表示支持革命、也來簽名表示決心。」

(44) 張玉衡前揭資料「十月十二日（陽曆十二月二日）張司令飭毀小北門大北門城外兩龍王廟、……凡門口所懸之科第及封贈榜畫摘下、否則以刺刀擊墮之。」しかし、文廟にたいしては、奉祀生を派遣したりしている（同右、十月十一日の條）。

(45) 『江湖會資料』二七頁 宋濟川口述「張國荃的隊伍秩序很好。時常救濟窮人、給一些錢他們買米買柴、有的多至兩三串。士兵的紀律也好、從來不欺侮老百姓、實行公買公賣、他們買東西不論價錢、要多少就給多少錢。對財主家却通過商務會叫他們捐錢助餉。」

(46) 『江湖會資料』三三頁 李文峯口述「南陽謝老道（謝寶勝）最仇視革命。光化一變正、他就派兵進犯光化。江湖會便率領群眾以舊式刀茅抗擊於豫鄂交界的光化孟家樓。雙方戰鬥了一天。謝老道見革命群眾鬪志昂揚、擔心所轄防地內部有變、不敢南進。保衛光化的孟家樓戰鬥以勝利告終。」

(47) 『時報』宣統三年十月二十一日（陽曆十二月十一日）「河南南西部

民軍起事、嵩洛一帶已聚至數十萬人、進逼南陽府。」毛拔前揭書南陽篇「十一月、河口謠傳『南陽鎮有馬步砲隊五千人、分道出發、電襄陽告急。』……而實勝亦卒以兵不用命、憤極自殺。」

(48)

毛拔前揭書籌餉篇「自光復以至取消分府、凡七十餘日、用錢十九萬餘緡、而軍餉居十之八、行政費僅十之二、綜計提用襄樊河口各署局存儲十一萬餘緡、而喜源遺存服物玩器三十九篋、紳商估價值售、得錢五千餘緡、富戶助軍、量資產區分上中下三則、依例認捐、數達卅餘萬、而實繳者才十之一。」『江湖會資料』三〇頁 劉仁貴口述「江湖會起義軍把喜源隱藏在襄陽寶豐和廣信兩大當舖里的箱子沒收充公。」軍人的給與的正確な額は分らない。一説では兵士は日に六十、七十二、八十錢、長官は一百二十錢だったといふ。『江湖會資料』二〇頁 左靜波等口述、また兵士は日に二百錢だったともいふ(同右二二頁 李文峯口述)。さらに軍隊の總數もはっきりしないが、ほぼ一萬人に達したのではないかと推測されるので、人件費だけでも相當な額に昇ったことがみてとれるであらう。

(49)

毛拔前揭書籌餉篇「府中設財政局軍需科、以紳士劉秉鑑・楊君諷・楊君直等董理之。」

(50)

『江湖會資料』三一頁 毛伯屏口述「襄陽光復後、軍政分府和軍司令部、所需一切物資、都未曾向老百姓徵派過、而是用現款購買。大約兩個月後、武昌就把軍餉發下來了。」

(51)

『江湖會資料』五頁 劉同妻口述「劉公的叔伯四房在清末分家時、原有田地一萬二三千畝、每房分到三千多畝。」同右三二頁 劉同妻口述「張國荃等來襄陽不久、曾問我家四房派過兩次款、每次約計一兩千串錢、每房分攤、負擔尚輕。」因みに劉同は劉公の弟で、不注意に煙草を吸ってかの武昌蜂起の發端となった漢口寶善里の祕密機關の爆發事件をひきおこした男である。

(52)

『江湖會資料』三二頁 蘇舜曾口述「我父清泉、……每年大約可收一千五百擔租穀。……辛亥年十一月間、張國荃部下管帶周鳳聲(鳴岐)率領一營隊伍來均縣招兵和籌餉、派我先父捐助軍餉三十萬緡。」

辛亥革命時期の湖北における革命と反革命

先父說沒有那多現金。第二天周鳳聲就帶了全營人馬來抄家。」同右三五頁 楊占彪口述「穀城起義的時候、當地大地主劉同茂・曾公茂和周光武(商會會長)都嚇跑了。因為起義軍隊向他們攤派軍餉。」

(53)

張玉衡「十年見聞錄」(『江湖會資料』附件)「十月初十日(陽曆十一月三十日)……撤團保總局。十月二十一日(陽曆十二月二十一日)……因團保總局既撤散、改為保安社。」『江湖會資料』三一頁 周宏彬口述「反正前襄陽團保總局、這是地方紳士辦的。……總局團總是楊廉溪、有團丁四十人。每個分局有團丁八人。我當時在總局當團丁。……張國荃來到襄陽後不久、團保總局一度被撤銷、後改名保安社、楊廉溪・張子琴等人相繼負過總責。」

(54)

『江湖會資料』四〇頁 毛伯屏口述「陰曆十一月初二日(陽曆十二月二十二日)後兩三天、襄陽軍政分府組織了軍事參議會。參議會的任務是協商籌措軍餉。……當時分府和總司令部有矛盾、設立參議會就是為解決這個矛盾。……議員以襄樊老河口有名的紳商為主、吸收各縣商務會長及名紳為當然議員、大約工作了一個月的樣子就撤銷了。」

(55)

『江湖會資料』五三頁 傅雲亭口述「(襄陽光復後)黎元洪就派馬收良到老河口組織同胞社、允許江湖會公開活動。老河口同胞社是武昌同胞社的分社。……當時各階層都有人參加。我在那時候加入了同胞社、老河口的大紳商參加的人也很多。同胞社規定發展江湖會組織、概由同胞社統一辦理、各大爺均不得私自開山堂和收兄弟。所以、這時候江湖會變得沒有力量了。……商務會的人全部參加了、但不久都烟銷雲散。」同右二二頁 肖明山口述「由於組織活動公開、士農工商各界紛紛加入、成分複雜、組織無法統一。所以洪門這種革命組織到這時候實際上已經解體、再也沒有甚麼力量了。」

(56)

『江湖會資料』一三頁 謝靜軒回憶錄「辛亥革命以後、哥老會的組織成分很複雜、他們思想上無非是爭權奪利、沒有為群眾謀利益的打算。」

(57)

謝楚珩「回憶辛亥首義和招討安襄鄖荆經過」(『辛亥首義回憶錄』

第一輯所收)「辛亥起義、對此等重要區域當然不能漠然置之、因此當陽夏戰事展開時、鄂軍都督府參議廳陳重民等向黎元洪提出收復舊安襄鄖荆道的計畫。……於是安襄鄖荆的收復計畫獲得都督府的通過和黎元洪的批准。并授予季雨霖以安襄鄖荆招討使的名義、飭速準備出發。……即於一九一一年十一月二十日(辛亥九月三十日)出發。」なお高仲和口述では十一月十九日に出發した(『江湖會資料』四〇頁)というが、今はどちらとも決めがたい。

(58) 梁鍾漢「我參加革命的經過」(『辛亥首義回憶錄』第二輯所收)安襄鄖荆招討使行署、系於十月初四日(陽曆十一月二十四日)成立於仙桃鎮。」

(59) 謝楚珩前揭回憶「招討使本部的組織……以張難先・梁鍾漢・李亞東爲顧問、以高仲和……等爲祕書、各科則以章裕昆……等爲科長。……我忝任參謀科長。」これは、梁鍾漢前揭回憶、高仲和『北征紀略』(謝楚珩の回憶の附註に所引)や章裕昆・張難先の著書と、職名および職掌について若干異同があるが、今はそれを深くは問わない。

(60) 謝楚珩前揭回憶「十二月六日到達沙洋。……關於軍事行動方面、當時有三個意見。……其二是襄樊被張國荃・黃仁葵占領、就地籌款、人民不堪其擾、地方望省垣起義軍赴襄。而本部顧名思義、應以收復襄鄖爲主要任務、自應積極前進、由襄陽繼續北伐、亦無不可。此一主張、極爲有力。」

(61) 張玉衡前揭資料「十二月初五日(陽曆一月二十三日)季招討使九點鐘蒞襄、住府署。」

(62) 『黎副總統政書』卷五「覆襄陽黃司令仁葵(中華民國元年一月十六日)電悉。光復襄樊勳勞卓著、俟大局底定、自當論功行賞。仍希珍衛勉爲其難、季雨霖計可抵襄、分府名義、各處一律取消、以後改稱司令。」

(63) 張玉衡前揭資料「十二月二十日(陽曆一九一二年二月七日)……黃分府去襄。」毛拔前揭書季軍篇「仁葵即決計行。……而襄事遂專屬之雨霖。」

(64) 『江湖會資料』四一、二頁 高仲和口述「當張國荃克復襄陽之初、……指派『吳王』二家先籌二十萬」(吳即吳西洲、大地主有田數千畝。王即王元興、大富戶有田莊百座、田地萬畝以上)、我一到襄陽、就曾去信王吳二家毋需認捐、此次來襄陽更下令將張國荃派駐襄陽的催款人員驅逐出境。當張國荃占據襄陽時、曾建制炮兵一團及騎兵一營。可是徒有虛名并無實力。……因此我即將這兩部建制概行取消、加以改編、資遣部分不可靠的官兵回鄉、其餘的合爲一營。」同右四三、四頁 楊占彪口述「季雨霖到襄陽沒有好多天、就把海鳳山調到襄陽去、說是將昇他做協統。……海鳳山一去。就被殺在襄陽的三眼井、這是壬子年正月初一日(陽曆二月十八日)上午的事情。……海鳳山被殺後、他的軍隊也就被遣散了。」同右三五頁 楊占彪口述「待海鳳山被殺後、他們就都回來、并對參加起義的人進行報復、紛紛向政府告狀、以致很多人逃亡在外、不敢回家。」

(65) 『江湖會資料』四二頁 李國鈞口述「任(宏鈞)標統是大爺。……任的弟弟在季雨霖手下當馬弁、又因任不是張國荃・李秀昂一道起義的老弟兄、於是季雨霖通過這層關係、寫信給任宏鈞、要他擴大勢力歸附季使、不要受李秀昂等的節制、并要他幫助季使去改編季秀昂軍。」同右四四頁 李文峯口述「季雨霖……殺車光慶。……又殺樊虎山。」車・樊はともに紅幫の指導者である。

(66) 謝楚珩前揭回憶「適奉都督府電令、『資遣各部冗卒、務須一槍一人徒手兵一律裁去。』乃向張國荃商議改編軍隊、將所部編成一旅、張托病不受命。根據襄陽士紳報告、僉謂、李秀昂有野心、梗阻編遣。」張玉衡『十年見聞錄』「十二月二十一日(陽曆二月八日)季授計於部下關龍、暗殺李秀昂於市、然後聲明其罪。」『江湖會資料』四三頁 傅道元口述「傅漢杰……從背後用手槍向李秀昂射擊。……接着出了告示、歷數李秀昂『北伐逗留不前』和『剋扣軍糧數十萬』等罪名。刺殺李秀昂之後、全樊城都由關龍部隊把守、關龍并在當天上午親自將李秀昂的軍隊調到河灘、加以改編。」

(68) 張玉衡前揭資料「十二月二十二日(陽曆二月九日)……傳說周鳳笙

〔周鳳聲即周鳴岐〕正法於河口。」

(69) 『江湖會資料』二三頁 王錦如口述「那天晚上、何炳坤(何義茂)曾對到會的弟兄們講、『滿清就要被推讓、我們紅幫弟兄現在有出頭之日了。』」

(70) 『江湖會資料』四五頁 張文漢口述「北伐河南回到襄陽之後、張國荃部隊中的一些中下級軍官、在政治上顯得疲乏了、沒有進取心和事業心。……從此、我們時常聚會、不談政治、成天花酒地的過日子。」

(71) 張玉衡前揭資料「二月初二日(陽曆三月二十日)……大旺洲劉軍統(八〇)到襄、駐道署。」

(72) 『江湖會資料』四五頁 任賓九口述「當時、張國荃駐襄的隊伍、無論人數和武器都比劉公的多、如果張國荃要打劉公、一定可以打贏、但張國荃沒有打。」同右四六頁 王金奎口述「劉公部下有個陳烈、……他認為劉公利用洪幫擴充軍隊、搞得不成體統、因而被劉公殺了。」なお本來の蜂起計畫で湖北軍政府都督に豫定されていた劉公

と現實に都督となった黎元洪のあいだには、かなり内訌した確執があったようである。たとえば、漢陽失陥によって武昌に危険が迫り、黎元洪が葛店へ逃げた際に、總監察劉公は黎を公然と彈劾しようとしたりもした(曹亞伯『武昌革命真史』正編三七四～三五頁)が、黎はこのような存在の劉公を體よく武昌から追いはらったのである。

(73) 『江湖會資料』四八頁 張文漢口述「當時我想、劉公和我們既然都是革命的人、大家爲種族而戰、爲甚麼不同心協力、却要彼此勾心鬪角你爭我奪呢?」

(74) 『江湖會資料』四七～八頁 毛伯屏口述「劉興第……擔任張國荃的私人秘書。在季雨霖・劉公・王安瀾等先後此上企圖改編與遣散張國荃部的過程中、劉興第受張國荃的指示、專門往來於襄陽武昌間作情報工作。民國元年初夏王安瀾所派部協統周景亞來襄改編張國荃部。……劉興第在省調查後、……發一電報、內稱、『景』茶較、『雨』茶尤壞、張國荃接電後便命令親信標統王開典將周景亞殺死。時間是在一九二二年六月十九日(五月初五)、上午八點鐘左右。」

辛亥革命時期の湖北における革命と反革命

(75) 『江湖會資料』四七頁 毛伯屏口述「鑑於周景亞被殺、感到會黨不成體統、張國荃這樣搞必然引起很大的事變。我們革命派……那知他們起來後不守紀律、不聽指揮、搞個七亂八糟呢? 正因爲這樣、我和其他青年學生都丟下了在張國荃部下擔任的職務、跑到武昌去了。」

(76) 張玉衡前揭資料「五月十三日(陽曆六月二十七日)……城中張劉軍變。……十四日……逢張軍數十人、向尹家集逃去。」

(77) 『江湖會資料』四九頁 李國鈞口述「本地人都希望劉公打贏、特別是富家紳商、跟劉家關係密切、如張振興(開雜貨舖)和劉子林(做過道臺)等富家的太太都同劉家太太結有『姊妹會』、更希望劉公打贏。」

(78) 張玉衡前揭資料「五月十六日(陽曆六月三十日)……門啓入、市盡閉、知左軍劫居民、多至數百家。至各親友處一看、皆長嘆。」

(79) 『江湖會資料』四六頁 大旺洲老人座談會記錄稿「劉公回襄後、首先回故鄉大旺洲省親、并大興土木、將原來很豪華的宅第修葺一新、住宅四周、圍以高牆、牆脚用大塊花石砌到一人多高、上面再砌青磚、此外築砲堡四座、派一營軍隊把守。」

(80) 『江湖會資料』附錄「張國荃身世」五五頁 張方興等口述「張國荃原籍天門縣、……有田地數畝、房屋三間。……至辛亥革命前夕、已是一家徒四壁了。」同上五五頁 尹澤生口述「張國荃爲人忠誠老實、待人和氣、不貪財、他做了襄陽道、滿人留下的好多金條、他沒動過一點。」しかし、同時に國荃の甥の張方興・張方順の口述では、「張國荃在襄陽時曾給家里寄過兩千吊錢、他父親把一千吊存在漢川田二河陳翠記花行。用一千吊錢蓋房子和補助家用」(同右五五頁)とい

っており、そのような面が全然無かったとはいえないようである。

(81) 『江湖會資料』五〇頁 夏大順口述「張國荃部隊是在襄陽被北伐左軍劉公打敗的。他們回到老河口來的路上、除了經過太平店時搶了一家當舖外、軍紀還是很好的。」

(82) 『江湖會資料』五二頁 阮達五口述「陸軍第三師王團長到襄陽後、當劉公未走時、王安瀾部隊駐襄陽、王殿一部紮樊城、……王殿一部

五六九

對劉公部隊是監視的。……不久、劉公北上去京、遺下部隊交王安瀾接管（大約有幾千人、不上一萬）。

(83) 拙稿「中國近代史における『資本のための隸農』の創出とそれをめぐる農民闘争」（『新しい歴史學のために』九九號）を参照されたい。

(84) 『江湖會資料』四頁 李文峯・閻石君書面材料「辛亥革命前、老河口買辦階級逐漸形成。辛亥首義後、買辦階級便完全形成了。例如『聚興隆』（烟業）、『李興發』、『春大』、『徐啓祥』等。他們都是依靠充當帝國主義傾銷商品。掠奪原料的走狗而成爲暴發戶的。其中規模較大的『李興發』、一家就經營了『太古』及『亞細亞』兩公司的煤油。」また、かの同胞社の社長（かつての老河口警察局長）が、同胞社解體後、この李興發によって「亞細亞分公司の管事」に任せ

られた（同上書五三頁程茂築口述）ことは、買辦階級の成長を如實に物語るものである。

(85) ブルジョアジー・小ブルジョアジー革命派の日和見性、傲慢性等の階級的弱點は、革命の過程で隨處にその顔をのぞかせている。すでに、同盟會成立に際し、湖北の責任者が歸國を肯じないという醜態もみられ、それをある革命家は「革命は内地で策動すべきであるのに、他國の首都に聚って、恰好のよいことをお喋りしているだけで、どうして達成できよう」と憤慨したというが（『湖北革命知之錄』余誠傳）、このような「革命」派が權力を握ると、たとえば漢陽光復後、知府になった李亞東のように、四人かつぎの大轎に乗って威張り、兵士大衆から排斥されるというようなことにもなるのである（『鄂州血史』一〇五～六頁）。